

ファーマの神殿

— 対面授業を求める人々に関する実証的研究 —

立 道 信 吾

1. コロナ禍の進行と大学の遠隔教育

アメリカのジョンズ・ホプキンス大の集計によると、2021年1月27日時点での全世界の新型コロナ感染者数は累計1億人を超え、人類の約78人に1人が感染したことになる。この未曾有のパンデミックは、世界中の国々の社会・経済に甚大な影響を与えている。わが国においては、2020年3月13日に成立した新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づき、2020年4月に緊急事態宣言が発出された。これに伴い通常の経済活動は中断を余儀なくされ、多くの産業が深刻な打撃を受けた。教育現場においては、5月以降、小中高校は現在のところ対面型授業が行われているものの、多くの大学においては、何らかの形で遠隔授業¹⁾を行うことを余儀なくされている。半ば強制的に始まった遠隔授業により、多くの大学では前途多難な〈ニューノーマル〉の船出を迎えることとなる。

2. 学費返還と対面授業の要求運動

大学で遠隔授業が続けられる中、twitterなどのSNSを中心に、①通学しないことによる不利益の補償を趣旨とする学費の返還や、②対面授業の再開を求める動きが広がっていった²⁾。対面授業に関して、自作の漫画をtwitter上で拡散することで、大学生の抱える問題を訴えた人もいる。twitter上のアカウント“maki @D6Hy1q0FQJuxtPO”に2020年7月17日に投稿された4頁の漫画には「大学生は、いつまで我慢をすればいいのでしょうか。」というキャプションがつけられ、対面授業が行われている小中高生と比較する形で、主人公の大学一年生が一度も大学に通うことなく、オンライン授業と課題学習に明け暮れる悲哀が描かれている。このツイートに対して、40万人が賛同を表す〈イイネ〉を示しており、リツイート回数は、16万回に及ぶ³⁾。悲壮感に溢れたこの漫画に触発されたのか、通学できな

い大学生に対する同情論とも見える tweet も散見された。大学生の母親とおぼしき人物によるある tweet では、こどものメンタルヘルスの悪化と、その原因とされる遠隔授業の中止、対面授業の再開を訴える内容が書かれていた⁴⁾。

3. ネット発言者に関する先行研究

ところで、ネット上で意見を発信する人にはどのような特徴があるのだろうか。吉野ヒロ子は、既存の〈ネット炎上〉に関連する行動を採った者の数が、ごく少数にとどまることを指摘している(吉野2019)。例えば、吉野が2015年に実施したモニター調査($n=945$)の結果では、ネット上で、炎上した者を批判したことがあると回答した者は0.8%、炎上事例に関する投稿を拡散した経験があると答えた者は2.8%だったという(吉野2016)。ネット上の炎上事例は、好奇心を刺激し、結果的に多くの人の目を惹く傾向があるが、実際にネット炎上に関わる発言や情報の拡散に携わった者の数は、ごく僅かということになる。

濱口桂一郎は、最近の政策決定プロセスにおいて、ネット上の発言が重視され、迅速に政策に反映される過程について〈ネット世論駆動型政策形成〉と表現し、こうしたネット世論に基づく政策形成の背後には、政策決定にかかる戦略の欠如、無戦略があることを指摘している(濱口2020)。こうしたネット世論の声が相対的に大きくなっている現象について早くから警鐘をならしていたのは、Cas R.Sunsteinである。Sunsteinは法学の立場から、著書“Republic.com”の中で、インターネット技術の発展の帰結として、現代社会における民主主義が脅かされる可能性があることを指摘している(Sunstein 2001)。彼が問題視する具体的なインターネット関連技術の1つに〈フィルタリング〉がある。検索結果や広告などが、過去の自身のインターネット履歴によって一定のふるい分けを経て、自動的に表示される結果、膨大な情報の中から、自分の関心にとって関連性の高い情報だけが、眼前に示される。あたかも狭い袋小路の中で、ひたすら深い穴を掘り続けるように情報が蓄積される現象がいたるところで発生する。この結果、グローバルに情報が行き交い、個人が無数の多様性を享受できたはずのインターネット通信が、人々の問題関心を特定の領域に閉じ込め、同じような考えをもった人々の小さな集団を無数に乱立させるといった社会の分断を引き起こすきっかけとなる。

我々が信じるインターネット上の多様性は、実はフィルタリング (=ITによる情報の事前のふるい分け) によって作られた、程度の低い多様性ということになる。さらに、Sunsteinは、集団分極化 (group polarization) という社会心理学の概念にも注目している⁵⁾。小さな集団に閉じこもった人々は、お互いの信じる情報だけを認め、それ以外の情報を排除していくことで、自らの所属する集団の意見を先鋭化させる。極端な意見が小さな集団を支配するようになり、個人の思想との乖離が明確になる。この個人には還元しえない集団としての特性が顕著に表れるのが、インターネットにおける発言行動である。最初は、一個人の小さな意見表明に過ぎなかったものが、集団分極化を経て、一種のバタフライエフェクトを起こして、徐々に過激な(あるいは穏健な)思想へと転換されていく。民主主義の根本にあるのが、個人だとすれば、この段階ではもはや個人の意思は集団の中で埋没してしまうという民主主義の危機的状況につながる。

この集団分極化には、risky shiftとcautious shiftの2つの側面があることが知られている。磯崎三喜年は、集団分極化のこの2側面について、既存の社会心理学の研究でも指摘されているような様々な要因が相互作用を起こして、実態としての集団分極化という現象を引き起こしているという整理を行っている(磯崎1982)。本稿で注目したいのはrisky shiftと呼ばれる集団現象であり、一個人の考えよりも多くのリスクを採ることに集団の決定が傾く傾向を指す。

集団分極化は極めて社会的な着眼点だが、見方を変えて、個人にも注目する必要がある。前出の吉野は、〈ネット炎上〉の要因として、〈サイバーカスケードモデル〉、〈社会的制裁モデル〉、〈憂さ晴らしモデル〉の3つを提示する。〈サイバーカスケードモデル〉は、集団分極化とほぼ同じ文脈上にあり、〈社会的制裁モデル〉とは、個人の寛容性や規範意識が炎上関連行動に影響を与えるというものであり、〈憂さ晴らしモデル〉とは、個人がストレスを発散するために、炎上関連行動に参加するというものである(吉野2019)。この吉野の実証研究では、最後の〈憂さ晴らしモデル〉を除いた2つの要因が相互に影響し合って、炎上関連行動に人々を駆り立てるという結論が出されている。

4. 対面授業か感染の防止か

ネット上で展開される対面授業再開の主張の背景にはいくつかのロジッ

クがあるものと推察される。そもそも大学設置基準第25条第1項では、主に教室等において対面で授業を行うことを想定していることから、対面の授業を求める意見には一定の合理性がある。ただし、今般の感染状況を鑑みて、文部科学省も遠隔授業に係る特例措置を講じているなど遠隔授業を実施すること自体は適法である。以上の前提に立ち、何故、対面授業の再開を求める声があるのかを以下の5つの論点で整理してみる。

- ①実習など対面授業でないと実行できない授業がある。
- ②大学生は、対面授業を前提に学費を支払っている。
- ③遠隔授業よりも対面授業の方が教育の質が高い。
- ④遠隔授業は対面授業に比べて学生の負担が大きい。
- ⑤対面授業が無いと学生同士が交流する機会がない。

①については、少人数に受講者を限定するなどしていくつかの大学で対面授業が行われているので、問題は②以降ということになる。②の対面授業を前提とした学費については、複数の大学の学生によるであろう、学費を返還すべきというSNS上の発言をみることができる。通信制大学ではなく全日制の大学として入学を決め、施設を使用していないのにも関わらずそれが学費に含まれているという主張がその主要な論点となる。③については、厳密な比較を経た後に判断する必要があるが、対面授業と比較して質的に劣るような遠隔授業の存在を全面的に否定することはできない。④については、課題学習などの負担が大きいという意見がSNS上で指摘されているが、あくまで課題学習に不満を持つ者の意見表明であり、実際の全大学生を対象とした調査を経ないと、これが真実であるかどうかは定かでは無い。⑤は事実その通りであり、さらに付け加えれば、学生同士の交流が大学の組織目的、あるいは学生の進学の動機に含まれている場合は、合理性があると言える。以上のような対面授業を求める意見の背後にある論理には一定の合理性があるが、対面授業の実施と学生や教職員の新型コロナへの感染がトレードオフの関係にあるとすると、要望の大きさに関わらず、対面授業を制限せざるを得ない状況が全世界的に進行しているというのもまた事実であろう⁶⁾。ではなぜ、リスクを冒してまで対面授業を求めるという声は出てきたのか。本稿の問題意識はこの点にある。

②～⑤の対面授業に関する論点の背後には、個々の論理を信じる複数の

人々が存在し、それらの人々がSNSなどで接触したり、あるいは自分の意見にとって有利な情報だけがフィルタリングされることによって、前述したような集団分極化を生じさせ、twitterなどでの情報の拡散に結びついた可能性がある。ただし、前出の吉野(2019)を始めとして、twitter上の情報の拡散はそのまま、社会運動として動員される人数の大きさと等しい訳では無いことを示す既存の研究も存在することにも注意する必要がある。ただし、一定程度SNS上で情報が拡散すると、こうした情報を民意に等しいと考えて、政策に結びつけるのが、前述した濱口の指摘する〈ネット世論駆動型政策形成〉だろう。現実にはどの程度の人々が対面授業を求めているのか、確固とした証拠となる統計も無いまま、対面授業が要求されるという動きがあることが新聞報道で確認される。例えば、2020年11月19日の朝日新聞には、「大学の対面授業 文科相が要請 大学側は『誘導避けて』」という記事が掲載されている(朝日新聞2020)。記事内容は、文科相のもとに届いた学生の対面授業を求める声に従って、大学側に対面授業を要求したところ、大学側からは反発の声が上がっているというものだ。果たして文科相のもとに届いた学生の声とは一体どのようなものだろうか。多くの大学では個別に学生に対してアンケートを実施しており、その中には、対面授業を望む学生の声も当然含まれているのだろう。だが、対面授業の是非に関する全国の大学生を母集団とした精密な統計調査の存在は寡聞にして知らない。

本稿の問題意識は、対面授業を求める人々の行動、その背後にある構造を明らかにするものである。本稿の前段では、集団分極化に注目し、対面授業を求める声の一端を推測しようと試みている。だが、それは既存の研究を援用した推測に過ぎず、事実であるとは言えない。そこで、以下では、この問題を解明するために実施したアンケート調査のデータを統計分析することで、実態の一端に迫りたいと思う。

5. 分析に使用するデータ

分析に使用するデータは、日本大学文理学部社会学科立道信吾ゼミナールと指導教員の立道信吾が実施した「新型コロナが大学生の生活に与える影響に関する緊急調査(以下ではこの調査を「新コロ調査」と略称で表記する)」である。調査は、①2020年11月初頭と②2020年12月初頭の2回に分けて実施された。調査対象となったのは、民間の調査会社に登録して

いる調査モニターの中から、東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県の一都3県に在住する大学1年生から4年生までの学生である。目標回収数を①の調査では600票、②の調査では200票とした。①と②のデータを接合し、データクリーニングの後に618件のサンプルが分析対象となった。なお、①と②の調査時点の違いは把握されているので、調査時点の違いをコントロールすることも可能である。主な調査項目は、フェイスシートの他、新型コロナウイルスの学業や生活への影響に関する質問を中心とした18問である。これ以外に調査の対象となったモニターが調査会社に登録している属性(年齢、居住している都道府県、世帯年収)の一部も分析に使用している。さらに、記述式で質問した所属大学の大学名、学部名、学科名から、大学の入学難易度や学部・学科の定員などをアフターコードした。以下の回帰分析においては、基本的な統制変数として、大学が文系か否かを表すダミー変数、大学の入学難易度、大学の学部の定員(対数変換後)、大学の授業料(対数変換後)、大学の学年、浪人経験者を表すダミー変数、女性を表すダミー変数を入れた。

6. 仮説

どのような人が対面授業を求める声を発しているかについて以下で仮説を検討する。まず、4. **対面授業か感染の防止か**で整理した対面授業実施にかかる論点②～⑤に対応した仮説を提示した上で、これら以外の可能性についても検討する。

第1の仮説は、〈学費相当〉仮説である。論点②に対応した仮説で、学生は対面授業を前提に学費を払っているため、学費が高くなるほど、あるいは、学費に対する意見が厳しい人ほど、対面授業を求める声は強まるのではないかという点を検証する。

第2の仮説は、〈遠隔授業の質評価〉仮説である。論点③に対応した仮説で、遠隔授業の3つの形態(オンライン、オンデマンド、課題学習)への評価が低いことが、対面授業の実施を求める声につながるかという点を検証する。

第3の仮説は、〈遠隔授業の量評価〉仮説である。論点④に対応した仮説で、検証は次の2つのプロセスで行う。まず、遠隔授業の3つの形態の授業に占める割合が、①学習意欲の低下に結びついているか。次に、②対面授業を実施する声に影響を与えるかの2点を検証する。

第4の仮説は、正常性バイアス仮説である。新型コロナへの感染リスクを過小評価しているせいで、通常の対面授業を求めている場合を想定する。

第5の仮説は、〈交流欲求〉仮説である。論点⑤に対応した仮説で、大学の対面授業が無い結果、友人関係や恋人関係などの形成、維持ができないことが、対面授業の実施を求める声につながっている場合である。

第6の仮説は、〈オピニオン強化〉仮説である。既になんらかの形で、政治的な意見があるものが、自らの主張を強化する目的で対面授業を求めている場合を想定する。吉野(2019)における〈社会的制裁モデル〉もこの仮説に含まれることを想定している。

以上の6つの仮説について、新コロ調査の結果を用いて以下で分析を行っていく。

7. 実証分析

7.1 対面授業の要求に影響を与える要因—〈学費相当〉仮説

自分の現在の考え方として近いものを、該当する選択肢の中から複数選択する設問の中に、「大学の授業は原則、対面授業で受講したい」があり、以下の分析ではこれを表すダミー変数を従属変数とする二項ロジスティック回帰分析を行っている。まず最初に、現在行われている授業が学費に相当するかどうかについてここでは検証する。一年間の学費(対数変換後)を独立変数に加えた二項ロジスティック回帰分析を行ったが、遠隔授業の3類型に対する評価を統制変数に加えた場合でも、統計的に有意な影響は見られなかった(分析結果表省略)。大学の学費の高低は対面授業の要求に影響を与えているとは言えない。

次に、自分自身の意見として、「大学は学費を一部返還すべきだ」を表すダミー変数を独立変数とした分析を行ったところ、統計的に有意な正の影響を従属変数に与えていた(表1参照)⁷⁾。大学の学費は統制変数に入っているため、大学の学費の高低に関係なく、学費を返還すべきだという主張を持っている人は、同時に対面授業を求めていることが示唆される。すなわち、大学の学費に関して一定の規範意識を持っている人、例えば、「大学の学費の中に施設の使用料が含まれるのに、減額が無いのはおかしい」といった意識を持っている人は対面授業を求めていることになる。これは、第6の仮説であるオピニオン強化仮説を支持する結果とも言える。学費負担に関する自身の公正感が新型コロナ禍という契機を経て強化さ

表1 「対面授業を希望する」を従属変数/学費返還を独立変数とする
ロジスティック回帰分析の結果

N=548

| | B | 標準誤差 | Wald | 自由度 | 有意確率 | Exp(B) |
|--------------------------|--------|-------|--------|-----|-------|----------|
| 文系ダミー | 0.191 | 0.231 | 0.683 | 1 | 0.408 | 1.210 |
| 大学入学難易度 | 0.019 | 0.013 | 2.307 | 1 | 0.129 | 1.019 |
| 学部定員(全学年) 対数 | 0.200 | 0.139 | 2.075 | 1 | 0.150 | 1.221 |
| 一年間の学費 対数 | -0.026 | 0.112 | 0.055 | 1 | 0.815 | 0.974 |
| 大学の学年 | -0.334 | 0.088 | 14.287 | 1 | 0.000 | 0.716*** |
| 浪人経験者 (全学年)ダミー | -0.294 | 0.262 | 1.262 | 1 | 0.261 | 0.745 |
| 女性ダミー | 0.400 | 0.238 | 2.833 | 1 | 0.092 | 1.492 |
| 大学は学費を一部 返還すべきだ 定数 | 0.670 | 0.227 | 8.714 | 1 | 0.003 | 1.954** |
| | -3.262 | 1.260 | 6.697 | 1 | 0.010 | 0.038* |

Hosmer と Lemeshow の検定の有意確率 = 0.45 Nagelkerke R^2 乗 = 0.09

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

れ、対面授業への要求という形で表面化したとも考えられるのだ。

さらに、この分析に遠隔授業の3つの形態別の評価や、遠隔授業の3つの形態別の授業全体に占める割合を統制変数に加えるとどのような変化がみられるのであろうか。前者について新コロ調査では、①オンライン型授業、②オンデマンド型授業、③課題学習型授業の形態別に、5段階の評定尺度(数値が大きくなるほど高評価)で回答を求めている。このうち、該当する遠隔授業を受けていない場合を分析対象から外して、①～③を個別に統制変数に入れた分析を行ったところ、結果は変わらず、3つの遠隔授業の形態のいずれを統制変数に加えても、学費返還が統計的に有意な正の影響を与えている(分析結果省略)。また、遠隔授業の授業全体に占める割合を統制変数に加えた場合も同様な結果が得られており、依然として学費返還が統計的に有意な正の影響を与えていた(分析結果省略)。後述するオピニオン強化仮説との関連で考えると、大学側がどのような質の遠隔授業を行っても、すなわち質の高い遠隔授業を行っても、遠隔授業の形態別の授業の量の配分を変えたとしても、学費返還を求めている人々は、対面授業を同時に求めているということになる⁸⁾。

7.2 対面授業の要求に影響を与える要因—(遠隔授業の質評価) 仮説

前出の遠隔授業の3つの形態別の評価を独立変数にした回帰分析を行ったところ、いずれも統計的に有意なマイナスの影響を従属変数に与えていた(表2参照。ただし、オンデマンド型授業、課外学習型授業の分析結果は省略)。すなわち、①～③の授業の評価が高まるほど、対面授業を求める声は少なくなるということである。①～③について、非標準化係数の大きさに注目すると、①オンライン(-0.704)②オンデマンド(-0.691)③課題学習(-0.43)であり、この順で対面授業への要求に影響を与えていることになり、影響力が最も大きいのはオンライン型授業の評価ということになる。課題学習型授業を巡っては、筆者の所属する大学の学生などからも、その負担の大きさからか不満の声を聞くが、他の授業形態と比べると、その影響は相対的に小さいことが明らかになった。7.1の学費返還を求める声との関連では、学費返還要求に対して、遠隔授業の質は影響力を発揮しないが、対面授業への要求に対しては影響力を発揮する可能性が示唆される結果となった。

表2 「対面授業を希望する」を従属変数/オンライン授業の評価を独立変数とするロジスティック回帰分析の結果

N=515

| | B | 標準誤差 | Wald | 自由度 | 有意確率 | Exp(B) |
|---------------|--------|-------|--------|-----|-------|----------|
| 文系ダミー | 0.292 | 0.250 | 1.371 | 1 | 0.242 | 1.340 |
| 大学入学難易度 | 0.021 | 0.013 | 2.538 | 1 | 0.111 | 1.021 |
| 学部定員(全学年)対数 | 0.137 | 0.146 | 0.880 | 1 | 0.348 | 1.146 |
| 一年間の学費対数 | -0.042 | 0.127 | 0.111 | 1 | 0.739 | 0.959 |
| 大学の学年 | -0.390 | 0.096 | 16.486 | 1 | 0.000 | 0.677*** |
| 浪人経験者(全学年)ダミー | -0.206 | 0.280 | 0.537 | 1 | 0.464 | 0.814 |
| 女性ダミー | 0.302 | 0.252 | 1.435 | 1 | 0.231 | 1.353 |
| オンライン型授業の評価 | -0.704 | 0.118 | 35.461 | 1 | 0.000 | 0.495*** |
| 定数 | -0.493 | 1.333 | 0.137 | 1 | 0.711 | 0.611 |

Hosmer と Lemeshow の検定の有意確率 = 0.78 Nagelkerke R^2 乗 = 0.18

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

7.3 対面授業の要求に影響を与える要因—(遠隔授業の量評価) 仮説

学習意欲の低下の度合いを5段階の評定尺度で質問した変数を従属変数とし、遠隔授業の各形態別の授業に占める割合を独立変数とした重回帰分析を行ったが、いずれも統計的に有意な影響は見られなかった(分析結果表省略)。遠隔授業の3つの形態別の割合と学習意欲の低下には相関が無いと言える。

次に、遠隔授業の形態別の授業に占める割合を独立変数とし、対面授業への要求を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析を行ったが、3つの形態のいずれもが統計的に有意な影響を与えていなかった(分析結果表省略)。課題学習の量が増えたとしても、対面授業の要求には影響を及ぼしていないことになり、「課題の量が多すぎる」といった問題は、課題を避けることを企図して対面授業を要求するといった行動には直接関連が無いらしいことが、この分析データにおいて明らかになった。

7.4 対面授業の要求に影響を与える要因—正常性バイアス仮説

災害などの非常事態に生じやすい認知バイアスとして知られる正常性バイアスが、新型コロナへの感染リスクを過小評価させ、対面授業の要求に結びついているのではないかと推察される。新コロ調査では、感染に関わる自身の考え方として「自分は感染しないと思う」、「自分は感染しても軽症で済む」、「感染が怖いので外食・旅行はひかえる」、「祖父母・知り合いの高齢者の感染が心配」、「周囲の友人・知人はコロナを警戒し過ぎ」に該当するかどうかを質問している。これらを独立変数に加えた分析を行ったところ、「周囲の友人・知人はコロナを警戒し過ぎ」のみが統計的に有意な正の影響を従属変数に与えていた。すなわち、周囲の友人・知人に比べて、相対的に新型コロナの感染への警戒感が低い人ほど対面授業を求めていることになる(表3参照)。大学に通う友人の数や、SNSなどで週に一度以上交流する人の数を統制変数に入れてもこの結果は変わらない(分析結果表省略)。さらに、回帰分析の結果は省略するが、「周囲の友人・知人はコロナを警戒し過ぎ」を従属変数とした分析では、独立変数である「自分は感染しないと思う」が統計的に有意な正の影響を与えている。自分自身は感染リスクが低いと考える者が「周囲は警戒し過ぎ」と考える傾向があるといえ、大学生にとっての準拠集団とも言える周囲の友人・知人の感染リスクに対する評価は、逆に否定されているという意外な結果が現れている。交

表3 「対面授業を希望する」を従属変数／「周囲の人間は感染を気にし過ぎ」を独立変数とするロジスティック回帰分析の結果 N=548

| | B | 標準誤差 | Wald | 自由度 | 有意確率 | Exp(B) |
|------------------------|--------|-------|--------|-----|-------|----------|
| 文系ダミー | 0.158 | 0.231 | 0.467 | 1 | 0.494 | 1.171 |
| 大学入学難易度 | 0.015 | 0.012 | 1.554 | 1 | 0.213 | 1.016 |
| 学部定員（全学年） 対数 | 0.212 | 0.139 | 2.346 | 1 | 0.126 | 1.236 |
| 一年間の学費 対数 | -0.008 | 0.108 | 0.006 | 1 | 0.937 | 0.992 |
| 大学の学年 | -0.358 | 0.088 | 16.482 | 1 | 0.000 | 0.699*** |
| 浪人経験者 （全学年）ダミー | -0.358 | 0.263 | 1.851 | 1 | 0.174 | 0.699 |
| 女性ダミー | 0.553 | 0.240 | 5.292 | 1 | 0.021 | 1.738* |
| 周囲の友人・知人は コロナを警戒しすぎ | 1.432 | 0.555 | 6.654 | 1 | 0.010 | 4.187* |
| 定数 | -2.860 | 1.224 | 5.464 | 1 | 0.019 | 0.057* |

Hosmer と Lemeshow の検定の有意確率 = 0.63 Nagelkerke R^2 乗 = 0.09

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

友関係の幅の広がりに関係なく、「(感染リスクの評価の点で) 孤立を感じている個人」が正常性バイアスを強めることで、対面授業を求めている可能性があることが以上の結果から示唆される⁹⁾。

7.5 対面授業の要求に影響を与える要因—〈交流欲求〉仮説

新冠調査では、①大学内の友人の数、②大学外も含めて、SNSやLINE、メールなどのコミュニケーションツールで週に一度以上交流する人の数、③恋人の有無を質問している。これらを独立変数とした分析を行った結果、①～③のいずれもが統計的に有意な影響を従属変数に与えていなかった（分析結果表省略）。一方で、コロナ禍における心身の変化を質問した「交友・交際範囲の狭まり」を独立変数にした分析では、統計的に有意な正の影響がみられ、交友・交際範囲がコロナ禍で狭まったと感じた人ほど対面授業を求めていることが解った。実際の大学内の友人の数を統制変数に加えたモデルでも同じ結果となった（表4参照）。さらに、分析結果は省略するが、スマホによる友人や知人との交流の時間が多くなるほど、交友・交際範囲の狭まりを感じにくくなっていることがわかった。

表4 「対面授業を希望する」を従属変数「交友・交際範囲の狭まり」を独立変数とするロジスティック回帰分析の結果 N=548

| | B | 標準誤差 | Wald | 自由度 | 有意確率 | Exp(B) |
|-------------------|--------|-------|--------|-----|-------|----------|
| 大学入学難易度 | 0.013 | 0.012 | 1.130 | 1 | 0.288 | 1.013 |
| 学部定員（全学年） 対数 | 0.158 | 0.138 | 1.321 | 1 | 0.250 | 1.171 |
| 一年間の学費 対数 | -0.058 | 0.112 | 0.273 | 1 | 0.602 | 0.943 |
| 大学の学年 | -0.362 | 0.089 | 16.384 | 1 | 0.000 | 0.696*** |
| 浪人経験者 （全学年）ダミー | -0.254 | 0.262 | 0.941 | 1 | 0.332 | 0.775 |
| 女性ダミー | 0.455 | 0.240 | 3.603 | 1 | 0.058 | 1.576 |
| 交友・交際範囲の 狭まり | 0.316 | 0.095 | 11.029 | 1 | 0.001 | 1.372** |
| 大学の中の親しい 友人の数 | 0.017 | 0.014 | 1.448 | 1 | 0.229 | 1.017 |
| 定数 | -3.208 | 1.267 | 6.411 | 1 | 0.011 | 0.040* |

Hosmer と Lemeshow の検定の有意確率 = 0.17 Nagelkerke R^2 乗 = 0.10

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

対面でのコミュニケーションを、オンラインでのコミュニケーションが代替しうる可能性がこの結果から示唆される。しかしながら、友人の数によらず、既存の交友・交際関係が狭まったと感じている人は、対面授業による人との接触を求めているということになる。解釈は難しいが、現状の交友・交際範囲の人間関係のサイズでは無く、「将来的に、交友・交際範囲が広まる（狭まらない）のでは」といった「新しい出会いへの期待」が、対面授業を求める声となっている可能性があることがこの結果から示唆される。

7.6 対面授業の要求に影響を与える要因—〈オピニオン強化〉仮説

新コロ調査では、今般のコロナ禍を通じた回答者の考え方や価値観などの変化を表す4つの設問である、①マスコミへの信頼感の低下、②政府・行政への信頼感の低下、③親や家族への信頼感の低下、④大学への信頼感の低下について5段階の評定尺度（数値が大きくなるほど低下の度合いが高い）で質問している。また、⑤「コロナ対応で自由を侵害されたと思

う」を複数回答式の1つの選択肢として提示した。これらを独立変数とした分析を行ったところ、④大学への信頼感の低下と⑤コロナ対応で自由を侵害された以外の①～③はいずれも統計的に有意な影響を与えていなかった（分析結果表省略）。それに対して、④大学への信頼感の低下が大きいほど対面授業を求める確率が高いことが明らかになった（表5参照）。また、「コロナ対応で自由を侵害された」と感じた者は、対面授業を求めていることが明らかになった（表6参照）。7.1からは、「学費を返還して欲しい」という考えの持ち主が、遠隔授業の質や量によらず、対面授業を求めていることが明らかになっている。大学の学費に対する固定的な考え、意識が、対面授業を求める声を強めていると言えよう。また、大学の行う遠隔授業については、「大学に通学する自由」「対面で学生や教員と接触する自由」といったコロナ禍以前は当たり前であった権利を、コロナ禍において大学の入構制限などで侵害されていると考えている者が、権利の回復を訴えて対面授業を求めている可能性が示唆される。

では、新コソ調査でみられる、自由に関する権利意識が相対的に強い者にはどのような特徴があるのだろうか。「コロナ対応で自由を侵害された」

表5 「対面授業を希望する」を従属変数/「大学への信頼感の低下」を独立変数とするロジスティック回帰分析の結果 N=548

| | B | 標準誤差 | Wald | 自由度 | 有意確率 | Exp(B) |
|---------------|--------|-------|--------|-----|-------|----------|
| 文系ダミー | 0.165 | 0.235 | 0.497 | 1 | 0.481 | 1.180 |
| 大学入学難易度 | 0.022 | 0.013 | 3.055 | 1 | 0.081 | 1.022 |
| 学部定員（全学年）対数 | 0.146 | 0.141 | 1.072 | 1 | 0.301 | 1.157 |
| 一年間の学費対数 | -0.061 | 0.117 | 0.270 | 1 | 0.603 | 0.941 |
| 大学の学年 | -0.359 | 0.089 | 16.210 | 1 | 0.000 | 0.698*** |
| 浪人経験者（全学年）ダミー | -0.411 | 0.265 | 2.407 | 1 | 0.121 | 0.663 |
| 女性ダミー | 0.384 | 0.240 | 2.561 | 1 | 0.110 | 1.469 |
| 大学への信頼感の低下 | 0.452 | 0.096 | 22.093 | 1 | 0.000 | 1.571*** |
| 定数 | -3.853 | 1.299 | 8.794 | 1 | 0.003 | 0.021** |

Hosmer と Lemeshow の検定の有意確率 = 0.27 Nagelkerke R²乗 = 0.13

p* < .05 *p* < .01 ****p* < .001

表6 「対面授業を希望する」を従属変数/「コロナ対応での自由の侵害」を独立変数とするロジスティック回帰分析の結果 N=548

| | B | 標準誤差 | Wald | 自由度 | 有意確率 | Exp(B) |
|------------------------|--------|-------|--------|-----|-------|----------|
| 文系ダミー | 0.121 | 0.233 | 0.270 | 1 | 0.603 | 1.129 |
| 大学入学難易度 | 0.015 | 0.012 | 1.451 | 1 | 0.228 | 1.015 |
| 学部定員（全学年） 対数 | 0.177 | 0.140 | 1.605 | 1 | 0.205 | 1.194 |
| 一年間の学費 対数 | -0.054 | 0.108 | 0.252 | 1 | 0.616 | 0.947 |
| 大学の学年 | -0.358 | 0.089 | 16.356 | 1 | 0.000 | 0.699*** |
| 浪人経験者（全学 年）ダミー | -0.316 | 0.263 | 1.441 | 1 | 0.230 | 0.729 |
| 女性ダミー | 0.476 | 0.238 | 3.982 | 1 | 0.046 | 1.609* |
| コロナ対応で自由を 侵害されたと感じる | 0.952 | 0.249 | 14.617 | 1 | 0.000 | 2.591*** |
| 定数 | -2.413 | 1.223 | 3.892 | 1 | 0.049 | 0.090* |

Hosmer と Lemeshow の検定の有意確率 = 0.93 Nagelkerke R^2 乗 = 0.11

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

と回答した場合を従属変数とする二項ロジスティック回帰分析を行ったところ、①大学内の友人の数、友人や知人とのスマホでの交流時間、②大学外も含めて、SNSやLINE、メールなどのコミュニケーションツールで週に一度以上交流する人の数は、何れも統計的に有意な影響を従属変数に与えていなかった（分析結果表省略）。これに対して、③メディアでの情報検索に費やす時間が統計的に有意な正の影響を与えていた（表7参照）。すなわち、メディアでの情報検索に費やす時間が多い人ほど、自由を侵害されたと感じているようであり、そうした権利意識の醸成には、友人・知人とのリアルな人間関係もオンラインでのコミュニケーションも関係がないらしい。むしろ、顔の見えない匿名の存在とのネット上での接触こそが、自由を侵害されたという意識を醸成していると考えられることができる。

8. 知見

実証分析の結果をまとめると以下の通りである。まず、第一に、〈学費相当〉仮説については、学費の額を一定としても、学費返還要求のある人に、対面授業を求める可能性が高いことが明らかになった。第二に、〈遠

表7 「コロナ対応で自由を侵害された」を従属変数／「メディアでの情報検索時間」の変化を独立変数とするロジスティック回帰分析の結果 $N=548$

| | B | 標準誤差 | Wald | 自由度 | 有意確率 | Exp(B) |
|-------------------|--------|-------|--------|-----|-------|--------|
| 文系ダミー | 0.578 | 0.295 | 3.833 | 1 | 0.050 | 1.783 |
| 大学入学難易度 | -0.002 | 0.015 | 0.010 | 1 | 0.920 | 0.998 |
| 学部定員（全学年） 対数 | 0.196 | 0.171 | 1.309 | 1 | 0.253 | 1.217 |
| 一年間の学費 対数 | 0.202 | 0.113 | 3.188 | 1 | 0.074 | 1.224 |
| 大学の学年 | -0.056 | 0.105 | 0.282 | 1 | 0.595 | 0.946 |
| 浪人経験者 （全学年）ダミー | 0.056 | 0.297 | 0.036 | 1 | 0.850 | 1.058 |
| 女性ダミー | -0.021 | 0.273 | 0.006 | 1 | 0.939 | 0.979 |
| GPA | 0.195 | 0.121 | 2.590 | 1 | 0.108 | 1.216 |
| メディアでの情報 検索の時間 | 0.459 | 0.205 | 5.008 | 1 | 0.025 | 1.582 |
| 定数 | -5.945 | 1.584 | 14.088 | 1 | 0.000 | 0.003 |

Hosmer と Lemeshow の検定の有意確率 = 0.335 Nagelkerke R^2 乗 = 0.06

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$ ※この分析ではGPAが統制されている。

隔授業の質) 仮説からは、遠隔授業の質が対面授業の要求に影響を与えていることが明らかになった。質の高い遠隔授業は対面授業を代替しうることがこれらの結果から示唆される。第三に、質とは対照的に、遠隔授業の全授業に占める割合である〈遠隔授業の量〉仮説については、形態に依らず対面授業への要求に関係があるとは言えないことが明らかになった。量では無く質の問題であることや、「課題が多すぎるから対面授業を求める」といった安易な発想を学生は持っていないらしい。第四に、正常性バイアスが働いた結果、対面授業を求める声に結びついている可能性が明らかになった。正常性バイアスの背景には、人間関係上の孤立や孤立からの脱却を求める動機があるらしいことも示唆された。第五に、〈交流欲求〉仮説からは、友人の数やSNS・メール等で直接交流する人の数といった人間関係のサイズそのものではなく、「サイズが縮小するという実感」を経て、サイズの縮小を阻止することをねらいに、新たな人間関係上の出会いを求めるために対面授業の要求へと結びついている可能性が示唆された。こうした人間関係のサイズの縮小に実際に歯止めをかけているのが、スマホな

どのITを用いた友人とのコミュニケーションであり、コロナ禍における交際のためのIT関連のツールが一定の役割を果たしていることが同時に明らかになった。第六に、オピニオン強化仮説からは、①学費返還の要求、②大学への信頼感の低下、③コロナ禍での個人の自由の侵害といった要因が対面授業と密接に関係していることが明らかになった。また、個人の自由が侵害されたと感じる者は、メディア上の情報により長く触れている者である可能性が高いことが明らかになった。

いくつか課題も残った。第一に、本稿に示された二項ロジスティック回帰分析の結果をみれば明らかなように、男性に比べて女性が統計的に有意に対面授業を求める可能性が高いことである。なぜ、女性に対面授業を求めているのか、この点については今後の研究で明らかにしたい。また、学年が下がるほど対面授業への要求を求める確率が高くなっている点についても確認できる。このメカニズムの解明や他にも対面授業の要求に影響を与える様々な要因については、紙面の都合もあり、今後の発表機会を待ちたい。

9. 結論

本稿では、対面授業を求める者がどのような特徴があるかについてアンケート調査で得られたデータを統計分析することで明らかにした。「対面授業を求める学生」とは一体何者であるのか、その一端が垣間見える結果となった。これらの知見からはいくつかの議論が導出される。

まず、第一に、文科相の要請を受けて、多くの大学では、対面授業の準備に動いているが、こうした行動の前提となるのは、遠隔授業の対面授業に対する機能的代替性への、主に学生側からの疑問の提示であろう。本稿の分析結果では、質の高い遠隔授業は対面授業を代替しうる可能性が高いことが示唆されている。なぜ遠隔授業ではだめなのか、議論を尽くしたのか、科学的な根拠に基づかないまま対面授業へ移行する大学の対応は、拙速の誹りを免れ得ない。いたずらに対面授業を実施すれば、大学にとって守るべき優先順位が最も高い学生、次に高い教職員らの生命や健康を危険にさらすことになる。他の大学がやっているからという理由で、科学的な根拠も無く模倣するといったPaul J. DiMaggioとWalter W. Powellが整理した組織行動の1つである〈模倣的同型化〉(mimetic isomorphism)とみられる現象が(DiMaggio and Powell 1983)、多くの大学で観察されるのではな

いか。あるいは、監督官庁による同型化の期待に応える形（あるいは「村度」という言葉で表現するのが適切な）での（強制的同型化 (coercive isomorphism)）とみることもできる。組織間の関係では無く、組織内部に目を転じれば、Amitai Etzioniの服従関係による組織の類型のうち、規範的・道徳的組織とされる大学においては (Etzioni 1961)、「教育は対面で行わなければならない」「教員は毎日出勤しなければならない」といった規範的な強制力が外部環境に関係なく、内部の組織成員の中で働いているのかもしれない。

第二に、対面授業を求める学生の中には、新型コロナ禍などの環境変化に影響を受けにくい、相対的に固定的な価値観、考え方の持ち主が存在する可能性が高い。対面授業の大学への要求は、彼ら・彼女らの大学への要求のうちの1つに過ぎないのかもしれない。平たく表現すれば、かつて一世を風靡した学生運動の残党のような勢力が、このコロナ禍において対面授業を求める声の背後に存在する可能性がある。

第三に、「匿名性」という性質こそが個人の正義感を刺激し、行動へと駆り立てる要因となっている可能性もある。Katy DeCellesとKarl Aquinoは、職場において自警団的行動を取る従業員が発生する組織的要因や心理的メカニズムを明らかにする研究を行っている (DeCelles & Aquino 2020)。彼らの研究によれば、正式な役職に就いていないにも関わらず、あくまで自らの価値判断に基づいて、組織内の腐敗や不正を取り締まる自警団的な役割を担う人が一定程度存在するといひ、不正の通報は匿名で行われることもある。組織の上層部から目をつけられない為には匿名での通報は彼らにとって大きな力となる。労働組合やその他の社会運動のアクターの機能が低下した現代の日本においては、匿名性と情報の拡散性が両立するSNSという場が、自警団的役割を担う人々のが好む活動領域になるだろう¹⁰⁾。本稿での知見である「メディアでの情報検索に費やす時間が多い人ほど、自由を侵害されたと感じている」点を考慮すると、情報検索に費やす時間が長い人ほど、自警団的な役割を担いがちであるし、そうした役割を担う匿名の人々に遭遇する確率が高いと言える。

第四に、固定的な価値観、独自の正義感を持った人々が結びつき、1つの運動として発展するためには、いくつかの条件が必要になる。それが冒頭で触れたSunsteinの強調する「フィルタリング」という概念や、既存の社会心理学の研究者が主張する集団分極化という現象だろう。サイバー

ワールドを彷徨ううちに、フィルタリングにより、自分の意見と似通っている者を無限に見つけ出す行動に人は駆り立てられ、似たような情報の洪水の中で考え方はより過激化し、小さな過激な集団がいくつも生まれる。SNSの多くは、本来なら直接交流することが難しかった人同士を、匿名という責任を問われない形式で結びつける機能がある。匿名であるがゆえに、本当に実在するのか、何人の勢力があるのかだれにも解らない、亡霊のような社会運動がサイバーワールドを徘徊し、あたかも大きな声を上げる者が多数いるかのように人の目には映る。まるでローマ神話の女神 Fama (ギリシャ神話では Φήμη) が実在するかのようなようだ。そうした本来なら存在しないかもしれない大きな声に動かされる為政者の〈ネット駆動型政策形成〉によって、ネット上の〈無数の監視者〉というパノプティコンの中で、国民は危険な意思決定を迫られる。ここがリュケイオンである。

注

- 1) この遠隔授業は、①オンライン型授業（インターネットを用いたリアルタイムでの授業）、②オンデマンド型授業（録画した動画などをインターネットで配信）、③課題学習型授業（教師が指示した課題を受講生が行う）に大別することが出来る。
- 2) 公式な統計は存在しないが、Yahooの提供するリアルタイム検索を用いて、2020年12月18日から2021年1月18日間の期間に、上記の①や②の考え方を端的に表すハッシュタグである「#大学生の日常も大事だ」で検索を行うと、1,143件のツイートが存在した。2021年1月18日14時20分現在における直近24時間での、ツイート数は50あり（1人で13のツイートをを行っているユーザーが1人いるなど重複を含む）、リツイートされたアカウントの数はこのうち16個で、これらのリツイート数は合計149であった。ただし、この16個の中には、100件以上のリツイートをされている発信者が含まれており、これを除いた1人の発信者当たりのリツイート数は2.9であった。以上の計測期間は、わが国にとっての2回目の非常事態宣言の期間中を含み、この結果、人々の新型コロナに対する警戒感は、以前に比べると相対的に高まっているため、対面授業を要求するツイートの数も相対的に少ない可能性もあることに留意する必要がある。
- 3) ただし、このツイートへの直接の返信の数は2,772と、〈イイネ〉やリツイート回数よりも大幅に少ないことには注意が必要である。

- 4) 仮に感染の脅威とメンタルヘルスの悪化がトレードオフの関係にあるとすると、この母親とおぼしき人物の言説は、“Think of the children”のような反理性的な側面を持っていると同時に、大学生に対する同情論にもとづく対面授業再開要求そのものが一種のモラル・パニックであるとも考えることもできる。
- 5) Myers & Lamm (1976) によれば、〈Risky Shift〉という集団分極化の特徴に最初に注目したのはマサチューセッツ工科大学のStonerによる1961年の未刊行の調査結果だという。
- 6) 感染による健康被害や生命の危険があったとしても対面授業をすべきだという意見が仮に存在するのであれば、それは戦争のために国民の生命を犠牲にする全体主義国家の発想と変わらないことになる。現にイングランド全域では、2021年1月5日に3回目のロックダウンを行い、それまで行っていた対面授業を中止し、遠隔授業に切り替えた。対面授業のリスクは決して小さくないことをこれらの事実は示唆している上、感染症疫学の知見に耳を傾ければ、リスクは予見できたと言うこともできる。
- 7) 以下のロジスティック回帰分析における分散分析のオムニバス検定の有意確率はいずれも0.05未満であり、本稿に登場する回帰分析の結果が統計的に有意であることを表している。本稿では紙面の都合で、分析結果の表を省略している場合が多いが、以下の宛先に連絡をいただければ、省略した分析結果の照会に応じる。連絡先：stat@chs.nihon-u.ac.jp
- 8) 2019年6月に「年金返せ」デモが起こっているが、現在の年金制度が公的社会保障に支えられていることを考慮すると、年金を国民に返還し、全てを市場経済に委ねるという選択は果たして国民のためになるのかという点を前出の濱口(2019)を始めとした多くの識者が語っている。年金と同様に、大学の施設使用料を学生に返還し、教室、図書館、運動場などを授業や利用の度毎に利用者負担で料金を払う運営方式は、果たして利用者にとって安くつくのかという検討が十分になされることが、学費返還運動の前提となるだろう。
- 9) 「自分は感染しないと思う」を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析の結果では、①恋人がいない人、②自分が自由に使えるお金が相対的に多い人が、統計的に有意な正の影響を与えていた(分析結果省略)。コロナ禍でも生活に余裕があり、恋人関係を求めている人が、感染リスクを相対的に低く評価し、結果的に対面授業を通じた他者との接触を求めている可能性があることがこの結果から示唆される。
- 10) DeCellesとAquinoの職場の自警団研究、David Weilの「分断化された職場

(The Fissured Workplace)」、丸山眞男の個人析出の議論(丸山1968)などをもとに、現代における労使関係の質的变化のうち、職場における個人の発言力の高まりを指摘した論考の1つに拙稿があるが(立道2019)、本稿では同じようなメカニズムの中にある現代社会における孤立した個人の発言に注目している。

※6年間一度も会わないまま2020年12月26日に他界した母にこの論文を捧げます。

文 献

- 朝日新聞, 2020, 「大学の対面授業 文科相が要請 大学側は『誘導避けて』」, 朝日新聞デジタル, (2020年12月13日取得 https://digital.asahi.com/articles/ASNCM6GJBNCMUTIL019.html?iref=pc_ss_date_article).
- DeCelles, K.A., and Aquino, K., 2020, “DARK KNIGHTS: WHEN AND WHY AN EMPLOYEE BECOMES A WORKPLACE VIGILANTE,” *Academy of Management Review*, 45(3): 528-48.
- DiMaggio, P. J., & Powell, W. W., 1983, “The iron cage revisited: Institutional isomorphism and collective rationality in organizational fields”, *American Sociological Review*, 48: 147-60.
- Etzioni, A, 1961, *A Comparative Analysis of Complex Organizations: On Power, Involvement, and their Correlates*, New York : Free Press. (綿貫譲治監訳, 1966, 『組織の社会学的分析』, 培風館.)
- 濱口桂一郎, 2020, 「ネット世論駆動型政策形成の時代の言説戦略と無戦略」, hamachanのブログ (EU労働法政策雑記帳), (2020年1月18日取得 eulabourlaw.cocolog-nifty.com/blog/2020/05/post-3d83ef.html).
- 磯崎三喜年, 1982, 「集団分極化とその説明理論について」『愛知教育大学研究報告(教育科学)』(31): 181-91.
- 丸山眞男, [1968] 1996, 「個人析出のさまざまなパターン」『丸山眞男集(第9巻) 1961-1968』岩波書店, 377-424.
- Lamm, H. & Myers, D. G., 1976, “The group polarization phenomenon”, *Psychological Bulletin*, 83(4): 602-27.
- Sunstein, Cas R., 2001, *Republic.com*, Princeton : Princeton University Press. (石川幸憲訳, 2003, 『インターネットは民主主義の敵か』, 毎日新聞社.)

- 立道信吾, 2019, 「産業社会学から見た職場」『日本労働研究雑誌』, No.709 : 63-72.
- Weil, David, 2014, *The Fissured Workplace: Why Work Became So Bad for So Many and What Can Be Done to Improve It*, Cambridge : Harvard University Press.
- 吉野ヒロ子, 2019, 「ネット炎上関連投稿経験者の特徴と批判の動機：ウェブモニタ調査による検討」『帝京社会学』(32) : 51-93.
- , 2016, 「国内における『炎上』現象の展開と現状——意識調査結果を中心に」『広報研究』20 : 66-83.

APPENDIX 記述統計量

| | 度数 | 最小値 | 最大値 | 平均値 | 標準偏差 | 分散 |
|----------------------|-----|-------|--------|-------|------|-------|
| GPA | 618 | 0.05 | 4.00 | 2.50 | 1.15 | 1.33 |
| 大学の中の親しい友人の数 | 618 | 0.00 | 100.00 | 4.32 | 6.71 | 45.00 |
| 週に一度以上直接交流する人の数 | 618 | 0.00 | 100.00 | 4.67 | 7.11 | 50.54 |
| 恋人無しダミー | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.68 | 0.47 | 0.22 |
| 大学は学費を一部返還すべきだ | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.63 | 0.48 | 0.23 |
| 一人でいると孤独・不安を強く感じる | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.32 | 0.47 | 0.22 |
| 大学の授業は対面授業を希望する | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.26 | 0.44 | 0.19 |
| コロナ対応で自由を侵害されたと感じる | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.16 | 0.37 | 0.13 |
| 自分は感染しないと思う | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.07 | 0.26 | 0.07 |
| 自分は感染しても軽症で済む | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.15 | 0.36 | 0.13 |
| 感染が怖いので外食・旅行はひかえる | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.17 | 0.37 | 0.14 |
| 祖父母・知り合いの高齢者の感染が心配 | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.44 | 0.50 | 0.25 |
| 周囲の友人・知人はコロナを警戒しすぎ | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.03 | 0.18 | 0.03 |
| 心身の変化：大学への信頼感の低下 | 618 | 1.00 | 5.00 | 3.34 | 1.16 | 1.34 |
| 心身の変化：交友・交際範囲の狭まり | 618 | 1.00 | 5.00 | 3.78 | 1.18 | 1.39 |
| 心身の変化：マスコミへの信頼感の低下 | 618 | 1.00 | 5.00 | 3.33 | 1.01 | 1.02 |
| 心身の変化：政府・行政への信頼感の低下 | 618 | 1.00 | 5.00 | 3.44 | 1.05 | 1.10 |
| 心身の変化：親や家族への信頼感の低下 | 618 | 1.00 | 5.00 | 2.27 | 1.08 | 1.16 |
| 時間の変化：メディアでの情報検索 | 618 | 1.00 | 3.00 | 2.47 | 0.63 | 0.39 |
| 時間の変化：友人や知人とのスマホでの交流 | 618 | 1.00 | 3.00 | 2.22 | 0.78 | 0.60 |
| 授業全体に占めるオンライン型授業の割合 | 616 | 0.00 | 10.00 | 5.59 | 3.59 | 12.86 |
| 授業全体に占めるオンデマンド型授業の割合 | 616 | 0.00 | 10.00 | 3.22 | 3.23 | 10.45 |
| 授業全体に占める課外学習型の授業の割合 | 616 | 0.00 | 10.00 | 1.19 | 2.22 | 4.94 |
| オンライン型授業の評価 | 618 | 1.00 | 6.00 | 2.84 | 1.32 | 1.73 |
| オンデマンド型授業の評価 | 618 | 1.00 | 6.00 | 3.21 | 1.60 | 2.55 |
| 課題学習型授業の評価 | 618 | 1.00 | 6.00 | 3.53 | 1.88 | 3.55 |
| 文系ダミー | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.69 | 0.46 | 0.21 |
| 大学入学難易度 | 600 | 31.50 | 78.00 | 47.81 | 8.22 | 67.60 |
| 学部定員（全学年）対数 | 609 | 4.91 | 9.41 | 7.42 | 0.76 | 0.58 |
| 一年間の学費 対数 | 570 | 0.00 | 14.33 | 4.68 | 0.97 | 0.94 |
| 大学の学年 | 614 | 1.00 | 4.00 | 2.67 | 1.14 | 1.30 |
| 浪人経験者（全学年）ダミー | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.20 | 0.40 | 0.16 |
| 女性ダミー | 618 | 0.00 | 1.00 | 0.73 | 0.44 | 0.20 |
| 有効なケースの数（リストごと） | 547 | | | | | |